

アンタゴニスト法で排卵抑制にレルミナ錠使用の有効性について

徐クリニック ARTセンター
徐 東舜

【目的】 最近Gn-RHアンタゴニストの内服製剤（レルミナ錠）が認可された。今回我々は、レルミナ錠をアンタゴニスト法での排卵抑制に使用したので、その効果を報告する。

【対象】 2019年3月～2020年3月の間の調節卵巣刺激にアンタゴニスト法使用予定の中で初回採卵患者に対しインフォームドコンセントを得られた96症例を対象とした（ 35.8 ± 4.0 歳）。同時期にセトロタイドを使用した99症例（ 35.0 ± 4.0 歳）を比較対象とした。

【方法】 月経周期3日目からhMGを連日投与し卵胞径が14mmに到達した時点よりレルミナ錠あるいはセトロタイド0.25mgを22:00に連日投与した。卵胞発育した段階でトリガー投与し、その36時間後に採卵を行い、採卵後7日目まで胚培養を行った。全例、良好胚を培養5日目に胚凍結し、その後凍結融解胚移植した。

【結果】 いずれの症例においてもLHサージや採卵時の排卵は認めなかった。卵巣刺激の結果をレルミナ使用群vsセトロタイド使用群で比較すると、トリガー投与日のホルモン値はE2： 2990.1 ± 1469.9 vs 2390.1 ± 1251.7 pg/ml、LH： 1.1 ± 0.9 vs 1.0 ± 0.9 mIU/ml、P4： 0.8 ± 0.4 vs 0.7 ± 0.4 ng/mlであった。採卵及び培養成績の比較では、採卵個数： 10.4 ± 6.6 vs 10.5 ± 7.7 、MII率： 91.5 vs 89.5 %、受精率： 76.2 vs 70.4 %、採卵後5日目での受精卵当たりの胚盤胞率： 59.2 vs 50.0 %、ガードナー分類で3BB以上の良好胚盤胞率： 31.3 vs 24.1 %であった。妊娠成績の比較では、移植当たりの妊娠率： 44.6 vs 48.2 %、流産率： 21.2 vs 24.4 %、着床率： 42.0 vs 43.8 %であった。いずれの項目においても両群間に差を認めなかった。

【結語】 レルミナ錠は注射薬のGn-RHアンタゴニスト製剤と同様に調節卵巣刺激の際の排卵抑制の薬剤として有用であることが明らかになった。